第３回　2012年10月10日(水)

地球異変の現場を歩く

小林裕幸さん（朝日新聞　写真記者）

小林さんは朝日新聞の特集企画「地球異変シリーズ」取材のためシベリア、インドネシア、南極に行き各地で起きている人為的あるいは温暖化による変化・異変の様子を紹介しました。

●トナカイ遊牧民に迫る温暖化の危機

ウラル山脈の東1,000km付近の西シベリアのツンドラ(永久凍土)地帯でタイガ(針葉樹林)の森との境界付近で生活しているトナカイ遊牧民のネネツ族を取材しました。彼らはトナカイの肉や血を食料とし、皮で絨毯やテント、服や祭りの衣装も作り、骨はソリに利用します。このように主として自給自足の生活で、肉や皮、角などを売って得た現金で小麦粉や調味料、ジャガイモや銃の弾などを買います。トナカイはネネツ族にとって生活の全てです。付近は永久凍土で地面を40～50cm掘れば氷が出てくるので、そこに肉を貯蔵します。天然の冷蔵庫です。

シベリアの夏、トナカイは袋角(フクロヅノ)の時期。午後11時の夕暮れどきにタイガの森を背景に群れるトナカイの袋角の産毛が夕日に輝いていました。左下の写真は小林さんの傑作でお気に入りの一枚です。一見平穏な写真ですが、いままで20度以下だった夏の最高気温が温暖化により 25 度以上になってきたため、永久凍土が溶けて沼地になり、天然の冷蔵庫がなくなり、住む場所がなくなっています。また暑さに弱いトナカイの群れが日光を避けてタイガの森に逃げています。森に入ると見通しが悪くトナカイを群れに戻すことが不可能になるのです。

さらに、冬の平地でトナカイは雪を掘って地面のコケを食べているのですが早春に気温が高い日があると雪が溶け、夜中にそれが凍るとトナカイはコケを食べられなくなり餓死するのです。

温暖化に加えて石油会社が石油採掘のために道路をつくり、そのため永久凍土が溶けて沼地が広がっただけでなく、森を伐採した使用済みの機材が放置され油が地面を汚すなどの自然破壊が加わっています。結果として生活できなくなったネネツ族の人で放牧をやめ、採掘会社に雇われる人がでてきています。

●燃える大地の脅威　大量のCO_2排出

インドネシアのカリマンタン島＝ボルネオ島やスマトラ島に広がる熱帯雨林はオランウータンや極彩色の鳥が生息し、豊富な生き物を育むゆりかごであると同時にCO_2の吸収源として大きな役割を果たしてきました。この熱帯雨林は標高が低く、雨季に大地が冠水するため樹木は微生物に分解されることなく年月をかけて堆積しその上に熱帯林が覆ったもので、泥炭湿地林と言います。熱帯泥炭湿地林は、樹木を伐採して搬出するのが困難で、たとえ開発しても農業には不向きなため、長年、手つかずのまま残されてきました。

しかしインドネシア政府は1997年、大規模な農地開発『メガライスプロジェクト』として排水路を作ったことでその状況は一変しました。プロジェクトは、

100 万 ha にわたって泥炭湿地の中に網の目のように水路を張り巡らせ、泥炭層中の地下水を排水、土地を乾燥させ、大規模な水田にしようという計画でした。

水路で地下水が抜け地盤沈下が著しい。

やがて乾燥が進んだところで焼き畑などで泥炭に着火すると数か月燃え続け、大量の CO2 が排出される事態が起こりました。生活や航空機の航行に支障をきたして国際的なニュースにもなりました。泥炭層が燃えることで年間20億トンのCO2が排出されています。これは全世界の 8%に相当し日本の排出量 13 億トンをはるかに超えています。そして野生動物の生息域が激減していることは想像に難(かた)くないところです。

●暖まる南極　ペンギンに迫る危機

地球の平均気温の上昇は 100 年で 0.74 度ですが、南極では 50 年で 2.8 度も上昇しました。真っ白な大地のイメージが強い南極大陸ですが写真のように近年、草原のように色づいています。スノーアルジ(snow algae)と呼ばれる雪氷藻類が広がっていて、「雪原にペンギン」というイメージからは程遠く、「お花畑のペンギン」あるいは「雨に濡れて泥まみれのペンギン」が見られたのです（**写真下**)。ペンギンのヒナの羽は水をはじく力が弱く、降雨にあって凍死する例が出てきています。

●　取材の裏側

小林さんはこのほか世界各地の暴動、内戦、天災の現場に数多く派遣されました。持参する道具はカメラの周辺機器以外にパソコン、衛星電話、電池、登山用品（雨具、ザック、ナイフ、ヘッドランプ）などです。そして現場に入る前に通訳、車両を確保し必要に応じて国連機関などに取材申請をする。時にはボディガードを雇うこともあるし野宿する場合は食料、寝具、調理小物、生活用品、防寒具など調達する必要があります。砂漠ではテントも張らずに毛布だけで野宿したこともあります。朝日新聞のカメラマンの中で小林さんが最も野宿取材が多いとのことです。(筆者との出合いも日露ビザなし交流でエトロフ島の生態系調査をしたときの野宿生活でした)

●科学者との共同研究

小林さんは国内では科学者と共同で自然環境の調査・取材をなさっています。

2005 年に知床の番屋を借りて知床財団と共同で調査隊を作り厳冬期に発信機をつけたエゾシカの行動や生態調査をしました。

2008 年は石西礁湖（せきせいしょうこ：石垣島と西表島の間に広がる国内最大のサンゴ礁）のサンゴの衰退を調査して 10 年間で７割のサンゴが消えたことがわかりました。

今年は須磨水族園との共同調査で大阪湾のスナメリ（海のマシュマロと呼ばれるかわいいイルカ）を空から捜したところ関空沖で多数のスナメリを発見しました。関空は生物多様性の観点から緩傾斜護岸を作ったので斜面が藻場となり小魚が増え、しかも周辺は禁猟区なので生態系の頂点としてのスナメリが生活できるだけの環境ができていることがわかりました。須磨水族園の科学者との研究で大阪湾内で奇跡的な現象が起きていることが明らかになりました。

■生態系、生物多様性を軸に地球の環境を常に視野に入れた取材をなさっている小林カメラマンの人柄がたっぷりと感じられた２時間でした。

（記録：村井弘二　報告：小田忠文）